

# “柳田富士松の病状と死”

～関係書簡から鈴木商店の実像に迫る～



辰巳会・鈴木商店記念館

2018年8月25日

■ 鈴木商店とは  
● 神戸・弁天浜  
に創業

1868年1月1日（和暦：慶応3年12月7日） 神戸港開港  
明治7(1874)年 鈴木岩治郎が松原恒七より“辰巳屋”の  
暖簾分けにより鈴木商店を創業（「洋糖引取商」として）  
明治19(1886)年、「神戸有力八大貿易商」の一つに発展



鈴木岩治郎



個人商店時代の鈴木商店

- 鈴木岩治郎が急逝[ 明治27(1894)年6月 52歳の若さで ]
- 店主・鈴木よね、金子直吉、柳田富士松による経営体制がスタート

鈴木よね



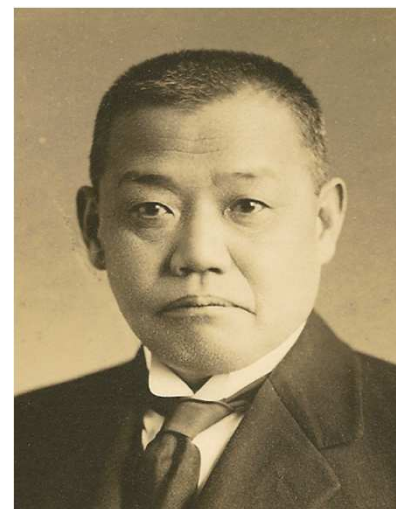
金子と柳田に  
経営を任せた  
「お家さん」

金子直吉



「樟脳部門」を  
任される

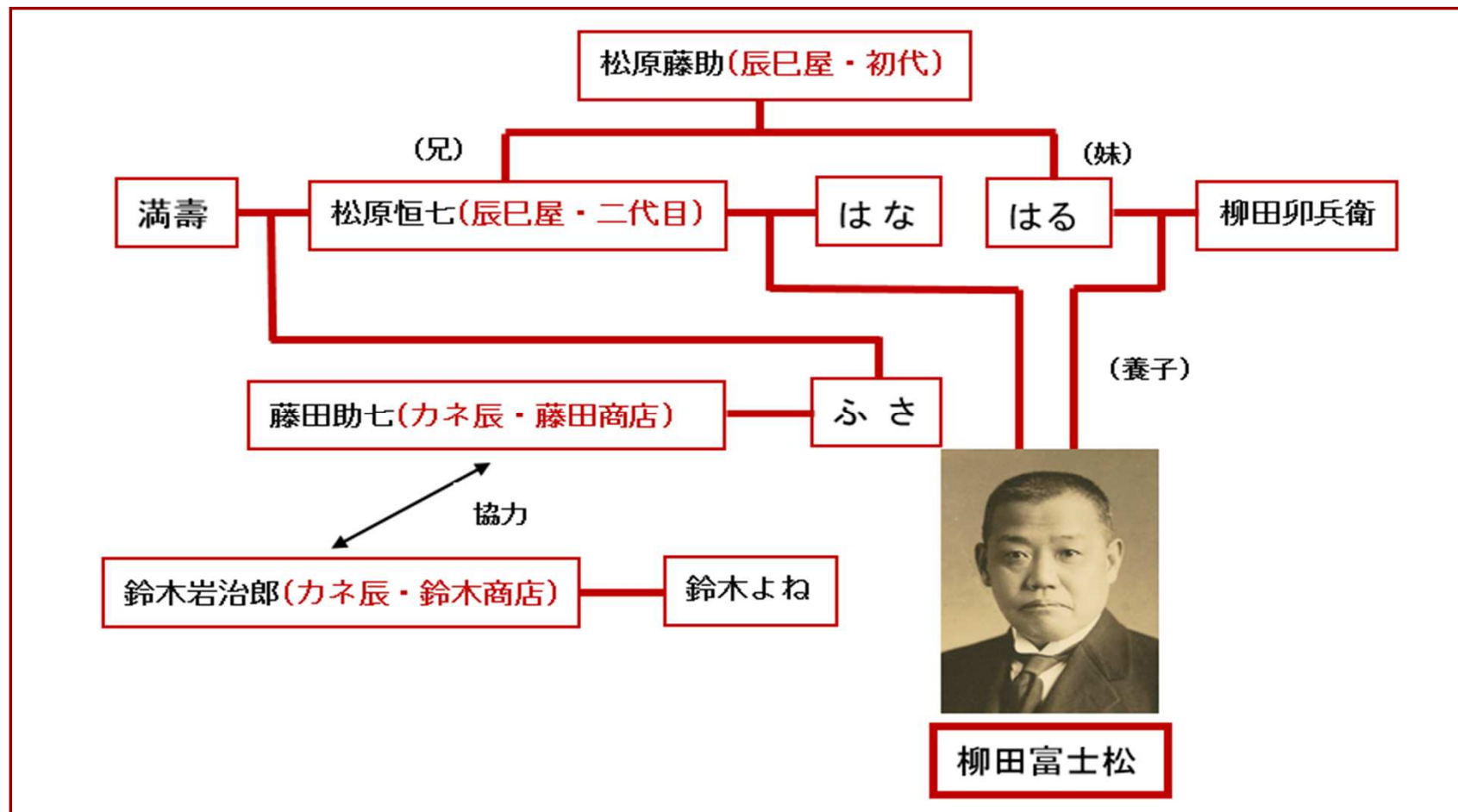
柳田富士松



「砂糖部門」を任される  
(後に金子を支える立場に)

## ■ 柳田富士松にまつわる略系図

● 慶応3(1867)年8月3日、辰巳屋恒七こと松原恒七の長男として出生



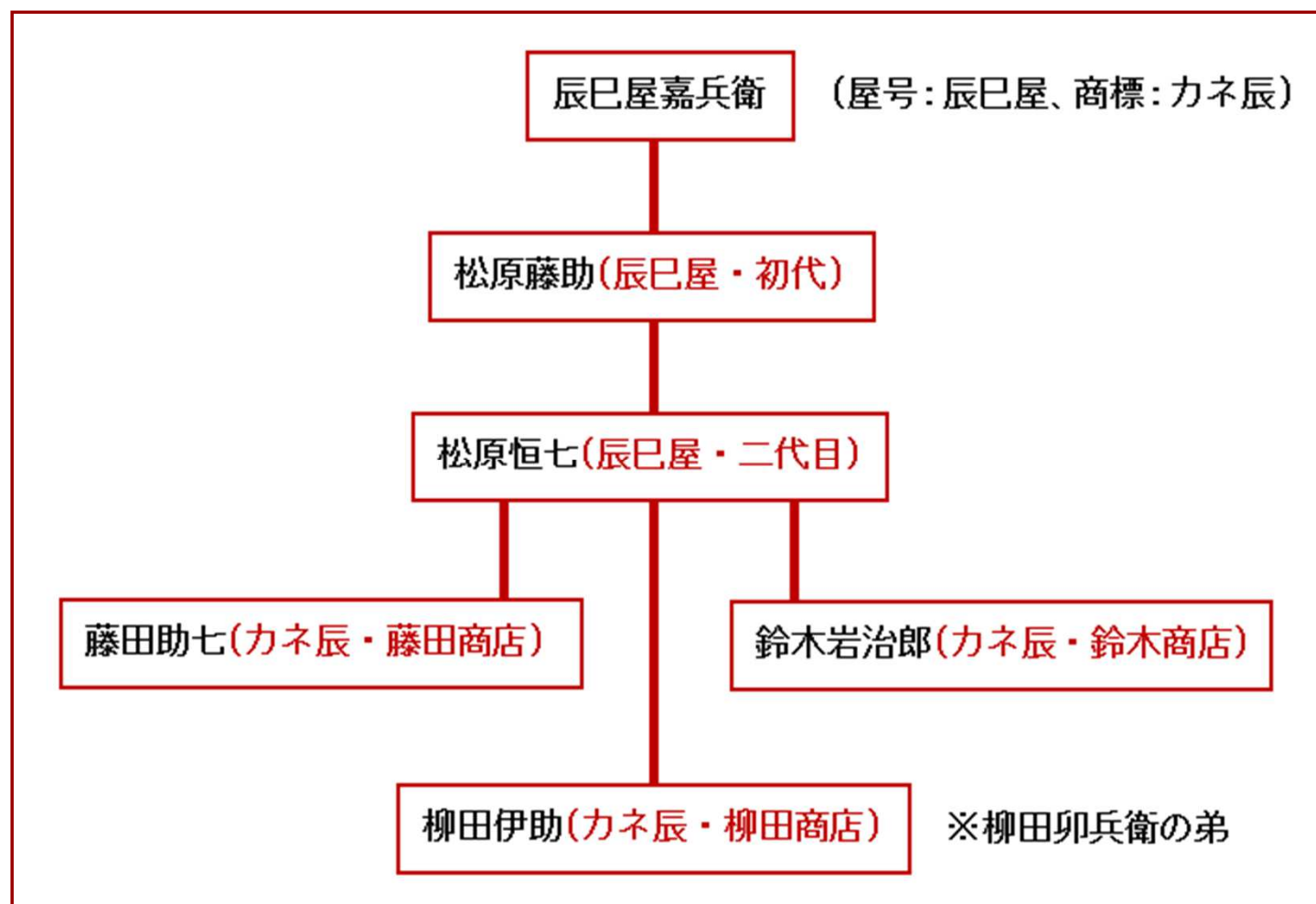
## ■辰巳屋の暖簾分け



松原恒七



藤田助七

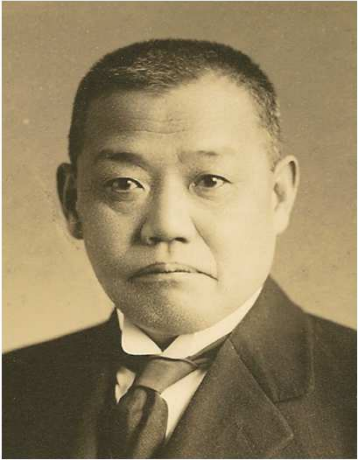




## ■ 辰巳屋恒七が大坂・天王寺の「一心寺」に奉納した石灯籠



## ■砂糖のエキスパートとして多大な貢献を果たす



- 明治22(1889)年に関西の有力糖商5社が設立し、香港車糖(くるまとう)の販売カルテルを実現した「洋糖商会」に出向。
- 柳田の指揮により砂糖の取扱いは飛躍的に伸び、特にジャワ糖では鈴木商店は世界一流の大手筋として他の追隨を許さず。

- 明治38(1905)年頃、砂糖の販路拡大のため自ら中国に赴き、上海、天津、漢口から香港のイギリス商人の地盤に食い込む。
- 柳田を中心にした鈴木の前鋒は、創業期の「大里製糖所」(明治36年設立)で生じた大量の不良糖を売却すべく中国本土まで出向き、すべてを高値で売りさばく。

## ■ 鈴木商店傘下の有力企業の役員を歴任

- 鈴木合名会社社員
- 豊年製油初代社長
- 浪華倉庫取締役
- 第一窒素工業監査役
- 株式会社鈴木商店常務取締役
- 帝国汽船取締役
- 神戸製鋼所監査役
- 大正生命保険監査役

豊年製油



神戸製鋼所



第一窒素工業





## ■ 柳田富士松の病状と死

- 大正10(1921)年頃から糖尿病を患う。
- 大正12(1923)年頃から脳溢血の兆候が表れる。
- 大正15(1926)年5月、脳溢血が発病。
- 神戸・塩屋の別宅に転地し療養を続けたが昭和3(1928)年2月9日、治療の甲斐なく病没。享年60歳

- 鈴木商店の破綻(昭和2年4月)前後の想像を絶する心労が拍車をかけ、死期を早めたか。



柳田富士松が眠る柳田家  
先祖の墓(神戸・追谷墓園)

## ■ 柳田富士松の人物評



- 少しも名聞を求めない穏健な調和精神の持ち主。
- 部下を信頼して仕事を任せ、時には激励を惜しまない心温かき人情家。
- 潔癖・真面目・純情で義理堅い。
- 品行方正で酒も嗜まず、勝負事も好まず。
- 堅実第一主義で何よりも信用を重んじ、同業者、得意先や銀行からの信頼は絶大。
- 鈴木家の大目付役ともいわれ、内部管理面にも目配りを欠かさず。

## ■ 柳田富士松の頌徳碑(昭和25年、祥龍寺に建立)

金子翁ト共ニ同店（鈴木商店）ノ二大柱石トシテ世ニ知ラル、  
金子翁ガ天衣無縫ノ躍進の陰ニハ常ニ翁ガ緊密周到ノ守備アリ



鈴木ゆかりの祥龍寺  
(神戸市灘区篠原北町)



柳田富士松頌徳碑(左)  
金子直吉頌徳碑(右)